燕石十種

望海夷談

五輯

九

千普日
679
52

679
52

早稲田大学図書

燕石十種第五輯巻九

墜海毎談目録

江戸書僧　活東子輯

王子權現　橋場神明　石濱
忍岡　淺茅ヶ原　上総山辺郡
利根川河伯　麻布七村　品川觀音堂
静勝軒　日暮里　氷川明神
津久戸明神　神田明神　芝神明
青山八幡　三田八幡　西久保八幡　并西谷山大養寺
山王　愛宕　目黒不動
根津　霞山稲荷并櫻川　生洲森
江戸城　古来上方ゝの道筋　牛込行願寺
ガゼンボウ谷　金地院　佃嶋住吉

三十三間堂
月桂寺
四谷西光寺
青山長谷寺
芝又智如来
麻布善福寺
東禪寺
○一舎利二舎利
○北条三郎
良經公横死
○深草元政
石川五右衛門
○城州淀城

三縁山
柳鳴平河山
駒込白華山
雲光院
東海寺
正覚院
宗房卿他情通
○源三位頼政
氏卿毒殺
赤座直陳
○茂樹先生
大塚村怪異
○君王丸兵

東叡山
太田青松寺
渋谷祥雲寺
浅草穀恩寺
廣尾光林寺
泉岳寺
○惺寓先生
○善知鳥
○張一元
定家卿古今集
○素山家茶器
○雪女
○秋津洲

○肥後國
洋獨獨姑
楠流軍學

小野通女
○荒紫琴

能古夫
○小野和泉

右通計七十三ヶ條
圏點の分十六ヶ條目錄に名有りて實なし

燕石十種第五輯卷九

埜海毎談

一武州王子權現を熊野の神靈とし後に奉を伊弉冊尊とし伊弉諾尊
車解王子とし配祀を或を此三神を合祭し又車解の王子は別に飛鳥
の祠とを寛永年中に飛鳥社を本社に系祀し又別に飛鳥の社
を立て王子を飛鳥のことを當所を王子と唱へ車解の
王子を祀る也武藏の豐嶋郡の領を豐島左衛門清光在家の時は同
郡の領を徙て權現を祭ることいつとも関東に下向して遠藤車右衛門尉
領を當國領の内に勝神を祠廣瀬の内也清光が父上総介廣家は豐嶋氏の
家祖にして清光が子孫に及て未社に祝し豐島清光廣家の小社也清光死して
其塚は豐島郡の親戸と呼て今の權現の社地より東の方に在村の員に
なり豐島清光が代に居住せし所なり其塚の有所は清光寺と号を
寺に入る大松是なり其の塚所也權現の社より南の方に平塚村といふ

死當作年

獄當件輪

文明の頃豊嶋勘ヶ由九郎と云人住せり是清光が子孫なり江戸城の古田
持資入道道灌の小机より敵きいたり道灌ふせぎたゝかひ後現の別當を金樹寺
と云世院の座敷の欄干より見るに京色家階より欄のかけ清き流を有り
所の山を切開き春の花は緑勢ふせよとの仕好なり樹を植込て又拾別の
京色なる院なり金樹寺の金剛明寺なり作文して石碑に建て是元文
丁巳の秋也又四ツ谷の光中賢村の西なる山に古城の跡有り是豊嶋九郎
経せ一所之同名勘ヶ由九郎と共に道灌に敵し其頃相模に元て豊嶋氏
の子孫にて豊嶋市平と申人清光廣家の小社に年〻参詣し金樹寺に参て
光祖の由緒を尋ねる也

○橋場神社

武蔵の橋場村の神明宮も豊嶋九郎建立と云伝へ世俗も岩淵領にて
昔は石浜村と唱へしと也当時の宮所より北へ十町余も南にて西に
なり天正の頃より当所に迂〻衰微せり世神明に源頼朝公源義経の所
此名代たてまつり給頃上杉の時代は社壇盤屋と源頼義義家奥州

よりの凱陣の時大祖経基王の武蔵の国なる此地一覧して有り此度奥の時豊嶋
九郎の家に立寄給ふ宮達餐に有て此鎧を鎧を別宮を建て宗〻の後
に世孔雀を掘て埋光塚とも其所を大塚村と唱へ是東泉寺の辺寅の方に
田圃を潰て森有る所にて唯一の神明也神徴を殺生を会釈と云当会釈は
二代にて二百年余る乃ち除地なり社領なり此物に光陰を送る源義寺
より十八町の所也其先祖は紀州なる熊野に住〻弓削氏に弥本伝濃大塚伝説
と云て古伝也そなはり〻て是宮也弥本会釈伝時の代に根来寺の勢力有
なる國を去て源〻勢州に移る門宮の辺に寓居せり古因道灌系宮の
家系金〻相伝に関東より下向の後当社の社人となる其子孫伝説長
伝説時伝常有教法之去と相續を信濃常有と会釈教法之去近は
三代千葉家より譜の字伝説世〻ひとり

○石浜

当代に居住せる石浜入道と云人也是始は東大和
と号して其先は野与銀代の人英法の孫にて左城也子孫にて有り

石濱城ノ跡

敬して常政ハ当所に来住せし濃州斎藤の兼凡の分賞凡上杉家の
分枝にして武州に在て返し当所に住居し六代目千葉次郎胤村に北條家
よりも来て家を継ぐ故に当所と共に天正十八年断絶を見る石濱城退去
せし跡の地に常政入道素経居城を設けて和歌を嗜む後其子宗郎続て
居住せし由其石濱城の跡今の金龍山にて聖天の宮所之趣にして挑るを
石濱と云ふ其石は浅草川の流にしておしなべて小石の所之を浅草砂利と
云て世に可用由出る所に此山の上砂利あるに故に其山を呼なして挑土山の下の流

今渡（イマド）

浅草川と総名を唱て是より又六町上の方を隅田川と唱ふ武蔵豊嶋郡
長江庄橋場村と下総の葛飾郡下河辺の庄の間に北南へ流る上は上州の
荒川下は今渡川今は角田川 今渡川皆渡川共 今渡橋皆渡橋共云 古き川船も是岸を世渡りの常
陸上野下野奥州の道路之

酒井忠右衛門

元和寛永の頃酒井忠右衛門と云浪人夫婦住ひ江戸中に疱瘡狂言して
纔細を角田川の謡にうたれが語るて施金を求て観世太夫方へ送りし秘
そこにも遊ばして置れたりと云ふ其砌忠右衛門此寺に有て角田川の堤の道へ出
遊を発すに飄然として往来の人に銭を貰ひ渡世し 小判梅若と号し当年の
跡の印也と路中の柳一本に名付云觸しけるによりて其後忠右衛門病死して
ゆかり有所なきは世話人葬る総泉寺の門前東の方小高き所に土地の所に
ある中に石有て是こそ忠右が墳と云

忍の岡 向の岡 入谷の岡

一武蔵の國にて今の上野を忍の岡と云湯島天神の高き所を向ふの岡と云谷中の
方を入谷の岡と云昔ハ芝浦の海此所迄入来る入江の続にて彼三ツの岡の中
續を以て谷中の岡に三崎と云地名有り其中間に有る池の大さ十二万坪有と
云傳ふ此池東は忍の岡北は西南の方は向ふの岡東北は入谷の岡東北近
にて其池は今の池の外当の民家居所の道もなしと云此池は不忍の池と号

感應寺

寺東の岡を忍の岡と名付し事は其むかし忍岡の如し今の清水村に
関野喜内光耀と云者何の地より清水出る故に実北氏が住居せし所なれば
近江の名ハ川寄て関の清水と人呼けり今も根岸の方にて本所弥某が

隠居しける所に有之ける塚有と云傳ふ忠の墓入此墓に對して池の北西
の方を向ひの墓と呼ぶ本食上人の霊雲寺の辺に隅田治部大輔治方と云ふ
者居住して水戸の小石川御屋敷辺経續けるを隅田か其家に嘉竹亭と
名付○辺を設て此亭の辺水戸御屋敷の内に有て今に其辺を嘉竹亭
と覚へ関東も隅田と江戸の城を吉田道灌が家人なる由之隅田が娘柳の前
云て十丈也又関東の者は感應丸と云て是も十丈也右に窓通して秋毎
に忍び出て此池中に浸しける橋を感應丸浸りて東北方無上の墓岸の先にて
柳の前と出逢て出会し此事は隅田が妻は柳の前が継母なりしが妬みて
池田に浸を橋の板を引放し是は感應丸戻らず秋の暗さに浸りを
も不覚池中に落て死ける柳の前は毎(イツ)も立チ待に相音の吹くる時は悼と
嘆り来て見る辺に結橋はづし有之所にし感應丸の落ける有形(アリサマ)也
柳の前大に歎き則池に飛入誤て其に死ける也秋毎に柳の前此所に出て感應
丸は待居し時の其辺の柳に腰をかけて柳を蛇柳と呼てよあり 其魂

出る辺の人申傳しなるを云 其柳當時池の端にありしは寛文十年頃
まで有りしと聞 天海僧正上野に在し時池中に辯才天を祀りし時此武人の
物語を聞きあひ哀憐をあひ弁天祠の側に引き移して武人の墓は築き弔
せらる當時右の方に小塚なる一聖天の宮は是也此宮の扉を開きみるに武人を
弔ひの事書記有りとる感應丸か父は是を歎き一字を建て名を取り感應寺と号し
寺門津をとりて光耀山と号すと也

浅茅ヶ原

一 橋場村の浅茅ヶ原の池を鏡の池と云有り其辺に采女塚と云有是は新吉
原大菱屋と云家に采女と云遊女有りいづくよりか出家来りて相親
しく金銀を費して其僧衰貧しく成りしかば其宿屋よりして
是を出入せしめて堅く來迎せざりしかば其僧も是より引請き出でなりたり
采女は我より引別れしと思ひ焦ひて吉原を隠れ出て此浅茅ヶ原に
来りて鏡が池に身をなげて死けりしを此塚に葬とかや其采女上着を脱
て池の辺りに捨置てしかば其の小袖のうちより一首を書残しけるとかや
其歌はとて猿沢の跡を鏡の池に残して また後を此塚も退けり

或書に 名をとんといはねど 猿沢の池よ鏡が池のあとなりと

梅若の事

世人世阿弥女の子ゆえ投げ事を梅若の母なるべしと云ふより尋ねそしむ
あるべきなり為なる其別のかなべきふ此池に身を投て死べきなり其髑髏を引あ
げ土中ふ埋らし時死骸の懐より硯出てこれを以世池ゆえ硯の池と名付教養付
て妙善尼と改名し其後千菩提の為に一宇式待び妙法堂と云ふ四ふ梅若
丸ハ寛永七年寅の三月七百年忌の供養為仏事ゆえ梅若丸母の事ハ
ふて遊女乗女ふ事ハ明暦三年酉の春江戸大火の後新吉原ふ引移ての後の
変なるハ御ふ八十年ふ及ふ大なる時代相違を取合せ為なる也なるハ行事も梅若
と云ふる事可笑延宝の初年平河山法恩寺ふ住給日覚上人内儀なる浄土道心
者世妙尼ふ堂を守り居ふ古き梅若丸面影にて梅若の母後の世面影を
強く直入なせらるゝ也と縁起ふ書載て宝物と拵為て世事上人のまのあ
たりふ見る事と也強ふ作りなる

上総國善性寺

一上総の國山辺郡ふ善性寺と云日蓮宗の寺有り世寺本堂ハ上総の國の内客
殿ハ下総国の内也其濃と近江の境自ふる藤堂の家ふ等ふ就ふて小の長

利根川 阿伯柳 太

と云所ふ今ふ福井と云城地の有所ふ福井ふて川を隔て向ふの町家の方を小の
長と云是より直ハ押通て北の長とよぶ今ハ福井と唱也

一刀根川ふ祢ことあと云ふる河伯有り年くるその居る所ふ番ふ所の者ども其居番
ふて居ふ所を刈ふ其居所ふて渦巻ふ又世川節ふ柳の根ふ世ふ大水ふ根と
も流ふ其柳の流止ふ岸ふて其根地ふ付て生ふる也

一民部の國渋谷　の内麻生ハ七村と云て所廣く其地名多広川ふ続き世迫ふて
番く布織出く多広川ふて是を晒く世ふ到ふ也ふ是の布の出所ふ六の玉川
の内むさくの玉川ハ布ふさらを調布さらを古ふ云ふもつら祢ふ

玉川ふさらを調布さらをむさくさらく人の意くさらく為ふ
是を以て和ふ云く麻布の内ふ筆橋と云ふ源義家東夷退治て凱陣の時世
所の川端ふやをらひをひくふ古刀の筆ふ川ふ所く流ふ拾ひあげより
世川を筆川と唱て是ふ流くふる橋を筆だくと云ふる由世ふ云伝て下渋谷の
東福寺ハ源頼朝の氏渋谷金王が産神也とて人の強き刀を寺の什物

金王桜
右馬桜

とて緣起をも添へまゐらせ葬桜の事をも思ひの通り載せてゆかむ〜おうら
世遠麻布村の内の小名小高谷といふを以て世布を高ケ谷川高ケ谷橋と唱る
を云傳へ〜あるべし〜想して民義の思中にては谷をやと唱る相撰出りそは
梅ヶ谷(ヤツ)比企ケ谷(ヤツ)扇ケ谷(ヤツ)と唱也當世にては世田谷(ガヤ)畑谷市谷雑司谷と唱ふ皆谷
谷中とも唱てやとといひ習ひすれて考ふべし〜世東福寺にて金王桜と云名木と
云幹は枯果て後世添ぎ云ふ異木也と堀ひしり〜並て大久保村の先桜木の
右馬桜はいつも見ぬ古木は枯て新木と添る品川の先大井村の一向寺の単桜(ヒトヘ)の大木
有て春毎に花見に来る人多〜経持の曰金王桜右馬桜世二木は江戸廻り迄
云ふその三ケ所の名木と吹聴を世大井村百年以前は大友家の領地と称る大友
左馬頭源義統朝鮮征伐の時古岡秀吉より没収せらるを数代の豊後の地を
失ひて悲きども回家断絶せ〜事を思ひ徳川殿の出馬へ出陣る恩ひ命を捨て
ものを以て食地を求ひたる地也不幸にして子息の代に早世ありて世家断絶〜
今の大友近ひる家は義統の二男牧野右京と云て細川家に在〜以其三男以

取立後年云　石出大友と名乗まる
一南品川観音堂の下以前は船着にて湊也口蓮房別よる池と往来も世布近
船にて来る者多くよりの通り依て此道筋其事〜跡有と往古品川九条と云者
此所に居住も其後古岡道灌當所に居住も観音堂より海晏寺までの通
道灌光所なる江城を築て引後もより其品川の湊を江戸迄くふ移せり
道灌の云居〜跡〜其後義呂国清る移住を海あくの田畑云ハ楓(カエデ)ありれは是秋ふ
成ては紅葉の密にて見る人酒肴以携へ待ものもさとりて寺ふ道灌塚有
給ふ是は寂明寺時頼の墓也と云へ伝へ〜る時頼の墓云ふ名あるは世所
まで往ふ云出ふ云ふ及灌の塚と云田畑と有を以て是以墓にて後人の
築〜る事も有べ〜今品川の海塚墳の往還神奈川六郷よりの誓也當所の後
ろ右ひめ〜より十條通入堀(ニツボリ)まで山續にて世迄石塚道灌頃多也本城は江戸にて
岩槻城は上杉居城にて有其るか〜構る故用事〜の為の道灌
當所以陣取〜て時〜居り暫滞留せる故る後ろに沿を構へ要害を設(ヲ)

楓。春は紅葉し
秋は食ふ楓

江戸岩槻の繋と世を道灌死後世陣荒廃して武田氏の僧甚だ居て善
提を弔ひ〜よを治める寺となりて道灌心静勝寺と号せを道灌の代今の
江戸の中城富士見櫓の別に廟所を建て静勝軒と名付け常に登り入て静
座〜或時を歌を吟じ楽めり我居ハ松永遠〜海辺〜不二乃ゑ根を望
端に見るを武蔵の名所なして當所の寺号をを太田掃部の家ハ道灌の来る
寺順二十石を源資家の子息資次を自得院と号を以當寺の心号を
自得心と改光今程ハ住持も太田家の十知の由
享保廿年乙卯年七月廿六日二百又十四歳於静勝寺太田掃部寛晴法事
執行文明十八丙年作歌
西の方武蔵国東の間を海船と云為年心為星居士云世名ハ唐の杜十
美詩二
窓含西嶺千秋雪門泊東吳萬里船

資次を自得院
二世忠不宣之
資次号見性院
道隆の父資清
を道道真号自
得軒本文の誤
信ジガタシ
寛資三伍ベシ

○日暮里　一入堀と云ハ今の谷中に出るを武蔵と世を春を花見とて肴げの拵る人〜の

志さを云ハ也昔の此廟の村を日暮里村といふむ〜日暮〜の里と名付一説
道灌時代の絵の上に書きを民別を侵さんと妻子を福付の世若又さ心ふも味
方の人数を狩く章一説ハ昔を道灌心と異名す後来道灌を慕ふ心
より此辺の里を名ふ塚武蔵て援を拵て布とを宝永年中東叡山の地谷中
の方へ引ぐるふ付て谷中の寺院所〜引移る付寺ハ寺當所ハ移ラ〜ハ
幸ふ道灌塚此地内の内となりしを世寺を太田掃別の菩提所として道灌の
子孫なる家なるを此塚の冥加也世寺ハ寺の後〜迄〜飯塚大明神の社有此辺
古の地神也世所なる船繋松とて古き大木さ心の堀る有此入ッ堀を東の繋より
先田畑の〜真中〜三河屋と云小村ハ〜来る先段の方千住川の小川堀を
小久と云三河屋より〜北ふ牡蠣むかり家ケ所ともふ長サ三町程有て古るのの
當所〜見を海辺ハ余程遠き所なるふ世所すそいの付代ふ断ふの見をむさ
所すて売をむ〜湯〜そ船繋ぎ松ハ〜ど昔〜る古木ふを以て考ぶ昔橋場辺
の方より此を迄大船の類近迄る程の川も有りしべ〜三川谷中の方へ続く

むり
今ふ作ぶ

を以て入砂の名と唱へて之れを砂の押入と云伝へ想て谷中より三河湾の水
までも古地を絶へ〳〵もなきと河水の揚るを見れば古来は入江なりし川もな
かりしべし

○氷川明神

一氷川明神江戸の中ふ七所有赤坂山門外の社江戸ふて八年々〳〵元大宮の辺
くふ小名と云所氷川を祠堂たりし社なり世所より迁〳〵多き所なれ八慶
の宮居武小名の宮と唱へ〳〵武湾て小古の宮と以素盞男尊根の國ふ追せ
られ給ふ麻の乳を磨の乳が家ふ入給ふ所武日の川上と以所なれ日の川上と以
河を以て氷川と唱て素盞男尊を祭る神也大巳貴命八素盞男の出給へ
とも世神八地神の祖〳〵なれと以て氷川の神霊ふを相共ふ祠る世人
大巳貴命斗を祠とのみ思へり将軍家の若君九氏神たる武以て享保
十八年戊の正月今井の地ふ宮所結構ふ出造受有て迁〳〵ふ赤坂の元
の宮居八慶年小古月十八日祭禮の時ふ神輿の出張所ふて有来る所の
大体義を深く秋の落葉行〳〵ふ世外今井の盛徳寺の門ふ氷川の社

麻布一本松の市中の社羽根田村ふて彩堀辺ふ所の社十法谷ふて羽根田の
原資　の社又小方のふて八上水の鑑成る年寺ふの社巣鴨の入口ふる氷川の社
頭八坂ふて上ふ見ふる所ふて〳〵いとかり〳〵〳〵行も氏子多く旅〳〵也

津久戸明神

一津久戸明神八富田道灌江戸の地ふ結社を迁〳〵祠る寛暦正十年ふ及氷川の宮を
迁せる又ふて始八牛込山門ふ宮居ふり江戸の城郭の出堀ふ節ふ
来の所文ふり初の完八幡の境内を割て社武迁〳〵武以て八幡の社神輿を
長餐〳〵ふて多ふ居も立並ひふり武社の氏ふ古の宮地ふて生きて居ふ人ふ
して當社地ふ相違ふ〳〵

神田明神

一神田大明神八加賀の神田の神霊武迁〳〵ふて大巳貴命武祝ふり給ふ常陸
の次監より平将門の霊武迁〳〵ふる事ふて以来家の順ふ
なる所ふ信仰故毎年ふ祭禮の後神事能有此能定永正德の頃より
不絶江戸の繁樂勤ふ當社古八神田橋の門有の角屋敷地也先
年中間の大火後今の湯島の宮所の地へ社を移〳〵ふり當所の古地の

共に往年安房の洲崎大明神も迂〜祀り牛頭天王の宮地なれて今以て三社を
建立毎年ふ俗馬町より旅せり為まとも當時神田明神の末社の如くなれば
明神の縁起より將門伐為るふ社明神の本社なれ傍ふ有事十ヶ所と載せり是社
為るかなり當湯殿る神社をりくるる共事いそぐきよませふ社も原を明神
の本社の門仮るふ初を納より寛永年中將軍家ふ不稼の御願るどきの事
奏聞ふ有勅命使として公家元和年間有て勅勅使の旨を伸て是神田の
神霊ハ將門の是くるよう門裏へも相伝へ人たるなるべ是を神田明神ハ將門の是
定るを以て是るるして相殿ふ將門も祝ひ納め神田大明神と名付たりと社人の門
よりの如く古より當社唯一なれ神号の持之係るから毎年元旦ふハ暁より後
茅芝麻道場白輪寺より出家大勢来て洋殿ふ入て誦為佛を勤む伝名
當社唯一といひがく拵る寺の持之と沙法行り江戸いまぐ茅剣の附ふ拵る流
の拵を以神の社門ふ延を変毎日誦を為佛をして勅進せり條の古例を以て
今ふ至る近例の如く社頭共の心ふ不叶といへども是非なき事之社家芝麻

宮門

○平川天神

一平川天神と申ハ當時麹町ふ宮居せりむ故其近所の町家近き頃ハ平川町と
名付く元川城之芳野の花ふ結産せりむ其地ハ外遠ふ並木の榎ふ古所有て
境門深く神さびより城内より後を来る厂ハ世不まて海り初て為て呼初る
とかや古ふふも事を為りよりの如と
そよ〜の四面を丁の一面ふ若ふ方ふそよると呼為る
手宮居ハ扇ヶ谷の上杉氏古面ふ主城と付古面道灌時く後を伝仰よりて
江戸城辺平川ふ〜〜〜を社領を梅氏拵迄並て〜を和今の平川
中ハの門梅林坂といふ為るふ平川天神氏湯殿の地ふ設けるとい
ハ湯之湯殿の宮居の事ハ寺ハ三丁目ふ真光寺といる寺の門ふ宮居有真
仮和ハ天神の中神体氏心為る道心者備るけて今の湯殿の宮居の不を厨
子の戸を明け開帳して往来の人毎ふ洗ませ散銭を為る支るを所の者共
ふ去到るを以て勅進〜手為る社を建〜為り世の人の為敬まり為る者共

湯島天神

寺の社ハ久安神体退轉せ〜ハ式谷ゟ移すとハ其の數年天神を伝ふ有常ふ
守神と崇ふ敬ヶ他の号像を高光寺へ送り〜ゟ神体ふ用ひ〜ゟ

○芝神明

一芝神明宮ハ國常立尊を祭ゟ外宮式社とを右の方ふ内宮の社有當社ハ
新堀の南の方有馬中務大輔殿の屋敷ゟ長屋ゟ添て神明の宮ゟ移ゟ是古の文
亀之ゟ年創の初ゟ方ゟの往還の地ゟて當所ゟ旅ゟ不ゟ者ハ是へ引也〜
今の繁昌ゟ数ふ有馬殿の後ハ古文の跡ゟて不ゟ和ゟ祭ゟ新古の
地此神明の社ハ是ハ墨岩ヶふ有ゟ其不今ハ青松寺の地町のそのふ奔走春の
堂有ゟて是を移ゟの奔走と呼〜を以て見れハ昔ハ墨岩ヶ移ゟと以ゟ
世ゟ今の移ゟ〜迂〜ゟ神明の古地ハ石河氏の方〜賣てその人の屋敷ゟ
てその四の百姓地〜神明の社を引迂〜ゟて世付の文ゟ保達遠江
ゟ屋敷迂〜信仰せゟ〜ゟ社領百石を寄進ふて繁昌也
一世初年青心是程町の入ふ八幡の文ゟ是ハ書ゟ屋敷の畑ゟ式ゟと
一息ふて馬ゟて来ゟ〜ゟを以て其息切繁ゟ〜ゟ故ふ其別ふ埋む馬頭観音と

牛頭天王と
ゟ〜ゟ笑甚

以ゟ縁ゟて観音と祭ゟ小堂式建〜ゟ別當の僧を是ふ付〜ゟ〜ゟ
の跡ゟ〜ゟて八幡の社と成ゟ〜ゟを元馬の事ゟ牛頭天王とゟ〜ゟ仰崇ゟ
べきゟ是を八幡と取誤事一ッ笑ゟ〜世辺昔ハ麻布の今井の内也

○三田八幡

一三田八幡と以ハ芝の田町ふ社ゟ元有馬殿屋敷の西ゟふ有〜當所ゟ迂をゟ〜今ふ
跡跡ゟ〜ゟて西へ入程の先ふ小寺ゟ先今者ゟ有ゟ無田源ゟ流辺鋼ゟ産神へとゟ和
平肥後ゟ殿中屋敷是綱ゟ屋敷跡也故ふ是所の坂を流辺坂と成也其近所綱ゟ
守ゟ年ゟ〜ゟて観世音の小堂ゟ有ゟ〜ゟ南へ十町余ゟ〜ゟて魚籠の観音堂
有ゟ三田ふと号ゟ是を以て見ゟ〜ゟ白銀の地の例近を三田と以ゟ〜

西久保八幡

西久保八幡社神躰ハ宗源院様ゟ伝ゟ仏宮の北隣ゟ
ふ西ゟふ大養寺と云有智恩院寺ゟて四十七日ふも東照宮の市東帯の神像を
拵て体ゟ是ハ小社のお通ゟ奉納ゟて是ふ奉字号像ゟて世寺ゟ鋼立〜と云
伝ハ式女ハ赤福ハ院様ゟ社せ〜婦女ゟて美筆開ゟて和學ゟ達を大和
琴ゟの章歌を作ゟと十二院の浄瑠璃を作文ゟ〜ゟ

○山王

一永田馬場山王の社は川越の南にて仙波の里野山に初る所の社にて文明年中道灌江戸へ迁せり其後宮所に井伊掃部頭殿の屋敷乾の方に服る也樹林少く殘る垣結ひ有り其後溜池に成る今迁也今の宮所也

○愛宕

一愛宕大權現元は別当信樂の多羅尾が家地に一堂にて建て祭る神躰にて元亨近傍及年号多く勝軍地蔵の号躰と仏像紀に有り神殿といふる僧是に抱き赤國(十五)を石門山と号と人の居地を拂ひ安置せむ所是也其神殿別当にて守り居る塔頭塔所の列なる金剛院也是岩の神霊は伊弉諾尊初る所當山の神躰は地蔵にて山城の愛宕と又名列にて幸地を神霊と

○目黒不動

一目黒に恭敬山龍泉寺と別當を唱て不動明王の号躰と長七寸日本武尊初る所の頃の尊の号像にて制にて神躰とかたを世傳不動と云習ひ武堂社のうちに号を建て以て見を當時奥院と称へ堂号古代にて尊を初る也

一説に日本武尊駿河の国に向て牧りに向て犬を曳き枯野の多く火を焼て付剣にて刈て伊勢と云

○根津權現

強盜の事愚説とも云たらん

一根津權現は大己貴命の神霊也是國津神にて実此去の根元なる神なる故に斯名付る初る或説に根津の里と云ふの強盜の長にて従属を強勇にて伝義有て所の人恐為ふる事多く故に彼が死して葬る所に後代まで中仏にて多を以て神と祭ひ根津權現と号と詳なる事紀無し然るに寛永二年將軍家の伊達産神と云ふ分今の宮所に結構に調ひ神霊に迁し伊勢も初りしに今の地に元根津と唱て千駄木村の東の服に小社を初り建てり

一震山稲荷社は世に震ヶ関と云唱る通りの南なる高家の屋敷に成る町屋にて其市中に有り名震山と名付て関所に制ふ有り右町屋にて久保町の南方近を押て揚田と唱るより也京極屋の屋敷前に續て天溝を昔は桜川と唱て其流增と寺の服に沿り杉にて神明社の境内流も埋て寺表の橋際丈に成る將監橋の際川流も今震ヶ関通の左右の町屋より東南の方近武家屋敷に替られて

横田町い麻布百姓町の西側(一西ヨリ移ル)ヨリ移ル故ニ稲荷も相異る移りき慶安の稲荷と
唱ヘリ永禄馬場南ヘ本多豊後ヨリ慶の屋敷裏ニハ溜池の末赤坂の山城ヘ世屋敷
の屋ふ大成横の本有世横を横田の元町とし是より東まで地名ヨリ唱ヘとそ

今ハ世横を略見香とそ

○生洲ノ森

一ヶ高縄通り京川より江戸ヘ通る往還也是江戸町ヨリ入次第の道節也北ヘ続て
今の牛町の地ハ古ハ生洲といふ海岸ニて葛西八ヶ浦の方よりの船ハ此ヘ山素
御ヶ葛西の船ハ此ヘ入る故ニ溜生洲の森を目當ヶ生洲の森ヶ　あらハ白路島の
巣掛る森を目當ヶと謂る早ヶも世所ヶ此辺ニ泉岳寺ヒ云の森を云る
なり泉岳寺古ハ溜池の南ヶの方巽ふ江戸見坂より是江城の方江戸の町家ヶ
谷底ヶ寺所深川まで善く見ヶるを以て坂の名とも世坂を生ヶて先今ヶ
古故丹後ヶ屋敷古ハの泉岳寺の地ハ世屋敷の向松平大和ヶ屋敷古ハ

泉岳寺

東禅寺旧地

東禅寺ヶ田地也世屋敷ヶ脇ヶの坂を霊南坂と云是東禅寺開基の和尚の名を
唱ヘヶ妙心寺派の解脱ヶて ちの芝ハ今ハ十三縄ヶ移りて海辺ヶ大門あり

海上禅林と頼を

○江戸城

一江戸の御本城太田道灌京川の居館を他ヘ移さんと思ヶより城地の古地を見立今の
上城の地を構へと秋初ヶて既ヶ為構の堀を堀ヶ始ヶ一ヶ坤の方数ヶ雲ヶ
て難ヶふ又陽炎ハ得て今の本城を修造ヶ本城ヶ移せり是吉祥の地
ヶて大将七人まで居城せり城也天正十八年八月朔日此居城ヶと定入らせ給ヶ
江戸ヶ繁昌の江城也以前の地ハ西脇ヶの山ヶ山ヶ谷ヶ遍る道節外
横田口の方横ヶ口也北条氏康ヶ入ヶ城ヶ付ハ門ヶを請入ヶを祝ひ是を小田原
門と名付ヶる
一古来上方節ヶ関東ヘの道節當国ヘ入て小机より神奈川ヘ通る六郷の川ヶ
渡ヶ世田谷より溝谷ヘ通り二本榎ヶ梨赤坂の一ヶ来溜池の東麓を北ヘ山里の西
脇ヶを十谷渡ヶ通り横場の渡場を越ヶ千住ヘ行ヶ渡渉本郷ヘ通りて
上ヶ北板橋ヘ行ヶ江戸繁昌ヶ付て江城中を初ヶ廣ヶ古来の道節今
ハ絶ヶ他ヶ人ヶ通ヶ江城より東の方ハ沼深田ヶて支ヶ先ハ海ヶ入て其和

まで小船を入れ繋ぎ入れば道灌息泊の亭を設け詩歌の吟有

行願寺

一牛込通りの行願寺と云る天台宗の東叡山開闢よりもなほ古しの大寺にて今の牛込山堀端より西の方酒井宮内の屋敷までは寺の境内也神樂坂と云ふ赤城明神の神樂堂の有り一説のごとく赤城明神の別殿寺の地也今の社地の元の宮有り所に別殿寺の移り退てより此寺東叡山の末寺にして番衆の院家の地也弘千坪の地面にて借地せり人家一がぜんが谷と云ふ山谷の北方の谷也寛永三年大御番の市蔭送の此谷に茶毘所を建て此引導所と号す古来未だ地に布施を志て此念仏を唱する門徒能登屋の向の地を願ひ求て有り所に此火葬せり故に此則寺を建て高光寺と名付号法号に崇源院殿高光大姉と号るなるよりて此寺の門の奥に地蔵を結廻り建て有り此火葬せり跡のまに大方捨を此火葬する所と一寺と成て智光寺と号を小石川極楽水の西方也傳通院智光大姉と

○金地院

法号せり故に也がぜんが谷と唱る事世の人謂る辯之義

堂谷と其頃よりの名有

一金地院は元来五山の司たり南禪寺の地に有り鎌倉中の号に其鎌倉中は大業和尚の開基也江戸西久保に金地院の院室は傳長老以初と云る日本の諸寺の司に恵猛と唱て是利時代より相國寺に成て是に抄録よりも同時代に相國寺の鎌倉中と成る豊光寺の兼元長老是を司るまで関東の事は是利の学校なる三要長老以下寺社の事に司り光の所に大同覺後は結長老を始めて三後光長老迂化し結長老も老年に及て公方に辞して駿府の因光寺の地を求て時々の出仕傳長老壮年にして才智有故其始を名代の如く諸事に紀せる也毎度出家の三人ども其職を勤ふ後て是る恵猛は南禪寺にて持寛永の末年迂化を本光禪師と謚を丹後の一色左京大夫まで支義 に成る也傳長老の師は靖叡長老と云て是は河内の真観寺に住す南禪寺に住職信素院に移る是を移り

○佃島

して金地院に住し傳長老其師氏相續をかるに依り當山家世親寺八代の
菩提所にて其由緒を以て當寺當山家世檀家なり此地の門に松舎豊後と當山
長門と石塔ありて彼系一族の時松舎の家滅して孫弟人なし當院滅罪の法事
供養不い別に立置葬送の門い外り殺て出入し寺院の名に死穢の出る人古
来より此儀も有て此家敬の院室なりしに客殿方丈まして丁寧に極て世二世良長老
是氏大真禪師と謚を三世善淵禪師は世通應禪師是氏三長老と云善
淵通應共に公逸の思召に基叶へ是世五海堂和尚世六大川和尚是は本下民部
の舎弟なり世七乾巖雪雄長老是當時享保の頃の住侶也

一佃嶋住吉の社は嶋摂州の佃嶋氏なり其の嶋と云は佃嶋の事
なり當島なる氏族の事は權現様御事大閤世世に伏見に出給ひ慶長四年
又年に大坂城西の丸に出座有し時其佃嶋の長作と云者此脇の急に用を義り
手後大坂より此帰に月此用に失を以て行ることなし人も無し多り度心有其後
大坂にて川に此の黄に影て勤らもしる石川又は郡(桐間)志間をうけらもしるなり

世能を拵を造る石川孫に此の黄に出る石川は世船の出る江戸の
東の海中に洲の有し氏是を彼に住居せり後八左衛門と改名
せり故是新の名氏八左衛門後に孫と称に住りて是を長作と称せり
世に居て大坂に出用義り名を相続に付則作右衛門と称る故に氏
孫に此脇の此用氏相違に成る事なれは大坂へ出猟師共を中も一所に
なりし上猟師とも同村に世人在り世に有る猟船を業世一網漁をしう
八左衛門後住居の業なれは古地狭き住居に築出し板等を住別て今の佃嶋と
成八左衛門後孫に伝海上渡世に住る者ども成是は住吉の宮氏勤住せ
氏是住吉の一類を招き神宮に宮を造り日向に是を造り新地なれは松
杉木の樹も植り是に長屋風小痛を育業し子ども為を植なれは思ひそびきを
渡りて神社の庭に是に棚橋渡して暮寿の花見に来る人多し渡し船の往
来繁し六月晦日に宮に住吉の後ひ日に氏世孫に成て是に花火に成
船に乗せ神楽義し船に乗て後魚猟年に為し渡世仕業に出所出

○孝作屋敷

歎しかバ京橋の南詰にて江戸屋敷を下されしかバ家建家代御用を務め中の者に配りて是れ彦兵衛屋敷と唱しが是も寛文の先後に他人の手へ渡りたり

○三十三間堂

一三十三間堂浅草新堀川の西の方にあり京都東山の林廉に有し頭痛の為め移し來る也彼の堂の前ハ通し矢とて矢数の長さ為めたりしまるなりて其より起りて堂前通し矢年々江戸ハ別て武士の武芸の集りの事なれバ当地に此堂有バ繁昌なるべしと思ひつき大坂屋久右衛門と云材木屋三十三間堂を建立仕度由相願是を建てり是年々矢数盛んにして賑ひしが元禄年中江戸大火の後其地を深川へ移し今ハ洲崎に是あり是より先ハ築地せて六万坪と申しまする先地探新田にして中川の端なる当時ハ此川を境て武蔵と下総と四を隔て東の所筋皆武蔵の地なり

○増上寺

一三縁山増上寺古へハ光明寺と云て真言宗にて赤坂の貝坂にありしが後年今の芝の地に移せり当時三代目酉誉上人の時傳通院の了誉上人の弟子と成是より寺も浄土宗と成増上寺と寺号を替たり酉誉より四代目を檀誉と云

此上人常に歎願にも法統の儀へ其雲為なりけるが上人記して其雲に飛鳥寺にて足代世する火車に乗りて云酉誉より八代存応源誉の時関東御入国と成て貝坂の寺前代此通りの時存応門前へ立出御休みされしが当地にての御菩提所の由御約束遊されて明朝当寺へ御入成さるべし御前にて上られ此様との御事にて翌朝御来臨遊されしより貧地の事なれバ差上べき品もなしと御粥を差上ル其御汁に黒大豆を入られたり是より御檀縁として此度依に同寺次第に繁昌し右の御粥を此寺の佳例として年々元朝の粥当寺の祝儀也浄土の法式定めにて大檀林の頭として諸檀林の能化当會下より皆出る江戸の本寺の智恩院と對称也光明寺傳通院是に差續て二番の大光院弘経寺常福寺ハ一番の衆也其外檀林残らん番衆也当寺の下知を得ることを以て大僧正なるなり

○東叡山

一東叡山寛永寺南光坊天海大僧正開基也當所上野と唱て藤堂和泉守高虎屋敷なり東照宮の御恩有ゆゑ此地に宮殿建初まる

此天海僧正の結ばれし寺院なりしかるに不忍の池に弁財天の祠ありしを坂本と名付しと見て叡山の移せる故也然て東叡山寛永寺と号せるも其山開闢の時の年号なりしと東叡山と云ふは常陸の国の名なり

千妙寺の山号なりしを叡山を東国へ移しなぞらへて東叡山と勅額賜ふ寺号是より始る天海僧正川越仙波の喜多院を造営し住職の時に東叡山と云の字を冠らせしと當山に東叡山と号せしめらるる他院の喜多院は此時より星野山と改られし院室の名に圓珠院と唱へ藤堂高虎右の坂本の地の御宮は元和三年建立に付其比別當の名に自分の院号に名付られ是を松院と唱へ天皇の塔は永く藤堂家より修理せり當時造立の分上行堂法華堂尾張家の御建立経蔵は水戸中納言の建立なり

二年中堂建立の時楼門吉祥閣を建也

一天海僧正ハ寛永二十年癸未十二月二日迄化百三十八歳也慈眼大師と稱ス
ル事ハ久遠寺院ハ法華経ヲ傳リ給フ法華経ハ
尾院法皇の中ノ也東福門院の中ノ分ニ有て 將軍家の御養子と成
さる事ハ本照院と申ス四世を同し法皇の中ノ也解脫院と申ス將軍家ニ
慈眼大師より天皇の血脈ハ法華経本照院ハ繼ぎ給ふ故ハ慈眼
ハ其嗣法也ハ日世大明院是ハ後光明院の中ノ也公辯親王と申ス
世靈元院の中ノ也公寛親王と申ス
公遵親王也

當寺の院主ハ論主寺の宮と申事ハ中之世の本照院ハ始て也ハ是ハ門跡
て也ハ法ハ嗣法成さるその後當寺ハ成し有し故也元寛永寺の事ハ慶安の産主
ハ御持ハ三門跡と申青蓮院妙法院梶井の上産と云共黄ノ輪王ノ宮と称ス

○月桂寺

一月桂寺川田ヶ窪ニ有御家也月桂院尼ノ建立也此人ハ天正十八年関白秀吉
公ハ関ヶ原ノ後ノ奥州ハ馬を入ラル別ハ止宿の所ノ夜の内ノ

内有人ハ御撰ミ生實の中ノ息女恋の成田ヶ息女容色麗きを以て女人加
ハ名さるとり既ハ中帰法ハ有ハ恋の息女ハ父成田ヶ怨ミハ那須の国ハ不願を
息女を中遣し成さる生實の息女ハ都へ召さる供をとハ中者ハ人ハ
関東ハ方の中ノ成ハ尊の御委細申しられ古河の義氏ハ御ひ召ハ恋慕ハ
中男子とし其跡絶て娘を初め義氏の中ノ合と成ル其中家絶たるを以て
實方の舎兄生實の兄利頼純當時ハ奥州境善連川ハ居住せり ハ入ル義氏
薨逝の刻三才あり女子有之ハ事ハ星氏ノ中尊ハ同事
ハ其所ハかこハ是有より中ノ故ハ三百石の扶禄を以て此長育也其後
殿ハ至ル委細成ハ聞ハ利頼純の子息成て其義氏の息女ハ要世関
ハ方の中跡を立ベしと仰出さるて有子娘ハ事を定めて當見の中ノ也て頼純の
子息國朝上洛の時殿ハ御朝鮮征伐として西ハ中之有し中跡成近て備前近
多り浮浪して妻ハ相道ハ義別ハて娘し有る途中ハ頼也し つ有ハ相果て 那て
月桂院殿ハ宮ハ中跡相続の事を願ハ国朝の舎弟頼氏ハ仰付ラル中尊

治の時御肖見相調しかバ兼て國綱が妻にすべしと義氏の御息女を直に頼氏の
妻にせよと御養女として是於賜り仰にて嫁娶相調義氏の跡にてまた喜
連川に居館せりと云傳ふ

頼氏の内室の事 喜連川の地にて説傳ふるには宇都宮下野守國綱の舎弟
遠江守が元妻也遠江守ハ那須の家と戦合の時討死に付其不慮早世の女
五百石の下に於寡婦として守居しが頼氏の妻と再嫁しけるを以世に五百石の
領地喜連川の領地と成しと云是を以て見れバ義氏天正十七年薨逝の時
に三才になられし女子を殿下より御扶持の地を賜と云より考れバ文禄三年の
比ハ漸八才なるべし然ば嫁娶せられしと云なれバ何程初かにても十三歳
なるべしと思ハる其初かなる義氏の息女も國朝死して後頼氏といまだ
配偶なき内に息女も早世なりしにて宇都宮遠江守が後室にも義氏の
御妹なり又ハ身近き一族なるを以て要綱殿下へ申上御免許を得て頼氏の妻
と定めるわけならんさなくバ夫と頼氏よりも遙年増にて始終の事傳へ齟齬せり

月桂院殿にハ大閤秀吉公薨御の時尼と成りて江戸大御臺にも京都よりの御同
道にて江戸へ下らまし折ゝ大奥へも御出ありし由其上大御所一宇建立し先祖の菩提を
弔ひさき由御成の後御免成て川田ヶ窪にて之地を下されしかど是を身に添ふ所の
扶禄を則寺領につきり一堂建立し月桂寺と号せらる依て位牌を立らるゝにも
足利の大祖尊氏公を正中に立並てたに義氏右に豊臣秀吉公と書載らり
秀吉公の御名代載る事 忠ある恩に報ひりし事とも立との額あり當山代秀吉公の
御位牌の事しかし當寺の之也別る由緒にも當寺ハ喜連川の家にて代ゝ菩提所

○法恩寺

一法恩寺本所柳島の地に天和年中より在寺也京都本國寺の末寺觸頭也其
古ハ太田道灌江戸在城の時ハ城の東北に寺院並居り浄土寺法恩寺の三寺
にて今平河山と称する故之其始ハ本住院と唱ふ道灌の嫡子六郎丸後に資康が
父持資入道道灌にハ主人扇谷の上杉定政かたに招かれ相州糟谷の旅館までまかる
至ゝ急に討手押寄浴室にて生害せりそ刻 然資康ハ源六郎とし未若輩にして
同國鶴の岳の塁に住居すれ其ち山内の上杉顕定へ従属し奉仕にて永正十年

九月相州三浦に於て戰死せり大明寺に葬る法恩寺月恩と戒名を其墓に源六郎
資高は相氏の旧臣北条家の威に推れ皆隨逐す資高も北条に隨ひより
一下忠儀して祖父の別式報せんと志し永正四年謀を定め北条の人数を江戸城に
搦めんとして事露はれ北條氏綱は至極の働と賞し息女を送聲
と大和に任せむとすれども江戸の本城は富永三郎左衛門二ノ丸は遠山
丹波守三ノ丸は大和守資忠に属し武蔵野三ノ丸道灌の江月亭と名付る梅林
の地に住人當城に生れ祖父道灌生害す城を立てられ今年三十八年目にて
城に移居せし後父三郎左衛門資康十三回忌に及ひ法事を行ひ城外の
本住院を招き供養の時父の法名式則其寺に送り此時法恩寺と号し
本式建立天文十六年資高三ノ丸にて病死し法恩寺に葬る萬好斎と謚を其
子新六郎康資は北条氏康の甥なれは康の字新の字を送りし然ども若年
なれは其儀三ノ丸に居られむとす月江戸城の家は先祖の城と云ひ父が働に北条の
ふ入し武蔵氏康の甥なれば當城に移るべき事なれども家臣を居守らしむる

事なれと常に憤り一方に岩槻の城を古河足濃守入道三樂に元相手に祖父は
以外なりて三樂と新六郎も道灌の祖孫なれて他人の未なりを以て三樂
と移憲改忠義不変なり何とそ北条氏に亡ん志して常に其働をせり
新六郎なれとも江戸城家なり先祖の生城なれば此方を其城なれ取ん
中送なり新六郎同心して其相談の事他不知事成安なりと法恩寺
の鬼神堂に参詣を其密談に任持同屋當城る事出来せば我寺も事危
なりと思ふより其同式富永遠江守に申付る事叶はざる先に早く新六郎
を生捕せよと討手を差向たれ是なり依て新六郎は相談の志なりて
三ノ丸を立去り本丸に居られ移り此時に討手の者共なれ差向新法恩寺
の住僧の弟なる同式同宿本沼弥右衛門なれ初なり新六郎なれ相談なる儲の事
顕はれと新六郎兄弟妻子一同に本郷の明寺に立退き世危不成遁れ難て
一味の事房州へ通り一度なり異義に人数を引率し玉府屋まで出張
せしなれば三万に成る新六郎も皆是見の陣に立城敵式待なれば江戸城より富永

遠江出軍の由を出羽へも申送る九月八日北条氏政軍兵を率して出て永禄七年正月
八日國府臺にて合戰有初度の討捕なれども後度の戰の味方討負軍兵の勢
房州へ引入て久しく新六郎の力戰數回なれども安房へ引入て十五年の後天正九年十月
八十一歳にして卒す武庵日高と号す三學も嫡子源六郎氏資家を倫中資家ながら
勅免ふ後て父ふ諫反して岩槻の城を圍出て是を見て佐竹氏頼て常陸へ
入て片野ふ在城して二男梶原美濃三男太田安房が時ふ及て常陸より秋田へ
佐竹も亦誓の時又落て其後兄弟ともふ武蔵へ招て奉公せしが兄弟ともに
子孫ふおのゝ散て城谷中の寺院寺の坊氏太田家より一所を
一宇氏とせしむ亦寺と称り多し九心浄心寺ハ新六郎康資が妻の父太田
十野右氏出府臺合戰の時新六郎ふ打殺して氏以て其書見氏殺
ことも親の事と夫の事と如何とも仕難く終ふ尼と成浄心と号て本郷の
九心ふ庵室を結ひ居て浄寺と成則寺号と氏も寺号ふ法恩寺の末寺也
○青松寺 一青松寺ハ愛宕山の濱也万年山と称を立ハ貝坂ふ有て当所ふ引多り

太田道灌の嫡男ふ青松殿と云少年有て早世家を葬て放世寺を
建て青松寺と名付る当所の俗ふ道灌江戸在城の時ふ飯倉世とよびて
軍兵氏入て是を一所へ世寺ふ道灌の守り本尊ふ観音氏安置一
堂氏建て寺氏為寺と称り也入國以来江戸城へ度うしよう寺ハ
他所へ引を観音堂計り殘て是を儘今ハ牧野駿河守の屋敷庭の内ふ
有り也初ハ心中ふ道有道ふ西ふの方牧野屋敷と成道其東の方青松寺
の境内へ今以て寺の心へ登りて是ハ林の内ふ其道有と云へ道灌の世の時ハ
長屋右面道灌ふ有り――と云
一西光寺今ハ四谷船板横町の北ふ有初ハ今の紀伊国坂の西堂の所ふ有後年
當所へ寺地引て故ふ紀伊国と称を其初 別の住人ふ田中某室家と云者
有て民と辛ひを交ハ討を引て氏憤を入道して以下と号して沉義せしふ
終ふ父の怒を解て引ゝ数年の困窮ふ義魄のまゝ執番屋一有て氏太田道灌
子孫を國屋敷ふ武勇氏常ふ感心せる心より道灌氏入日園ふ寄ふ所中ふ

西念寺一則同道にて江戸城へ参り扶持し、その後道灌姫江送り縁を結び、亡母を弔ふ為ふ道灌生害し、江戸城も退散せし故江戸表歎慎し、生涯も相果し、城外の紀藤山の内ふ庵室江結び西光塚と改号して念仏を唱へ、江戸往生して後人々是を寺ふ西光寺と名付、今が傳記等道灌ふ申ゆられし事ふ付物ふ記せり

○養源寺

一養源寺約四丈ふ有白華山と号す妙心寺流ふ稲葉古丹後ふ開基ふして其人の院号殊ふ多ふ其子息美濃ふ示則八黄蘗の鉄牛和尚帰依ふて在城小田原の地ふ其寺を建立也天沢山と称せり江天澤寺と唱へ 世養源寺建立の時の開基を玄麿和尚と云二代目東国和尚三代目天溪和尚是東国の弟子ふて始め堀尾山城ふの家人大沢氏の子ふて堀尾家絶しふて出家ふ

○祥雲寺

一祥雲寺法谷の廣尾ふ有大徳寺流ふして鎌倉の三流ふ年々輪番持也始め麻布市兵衛町の先ふ有江戸大火ふて当所ふ移ふ開基は龍岳和尚也

笑山領宗訴

春屋宗園
古溪宗陣
一凍紹滴
玉甫紹琮
蘭叔宗秀
月岑宗印
龍岳宗劉

恵瓊

藝州沼田郡金山城主武田刑部少輔信重ふ毛利家菩提所の住持安國寺也天正十四年従秀吉公於伊豫之國内賜二万三千石也山口入道従諸大名俸禄を送らる都合十二万石の身上也

玉甫紹琮 三河仔細ふ暗昧之子也 細川幽斎 舎弟也 紫巖譜略

又若狭ふ武田宮内少輔宗薫聟也恵瓊の父刑部少輔信重ハ別人也尤時代の古き事一世計り

龍岳西國ふ出て恵福寺の龍室和尚の弟子ふて其寺ふ住居せり一説ふ関ヶ

承久戦終て藝州の安國寺惠瓊和尚も罪せらるゝ事有て出家和尚八東福
寺の先住の事なれハ其首級ハ取て葬らべしと龍安頻りに歎くとも大衆是
ハ取られん事を恐れて同心せず係る新発意を人思ひ立其首級取揚の強く事
福寺ハ出家たらんものハ一人もなしと嘲哢して流を捨て大徳寺流と
成大徳寺の廣照禪師古溪和尚ハ千の利休の事なれハ大閤より出給有て
出寺せり其後赦免とゝ雖も帰寺せず大徳寺其門の總見院をゝ中ゝ南ゝ
殯て市屋道叔と雖も其後迂化して月峯の弟子と成て古溪の横雛の時
若僧侍ハ不絶合罪ハ得ハ忽生害せんと者懐剣嗜て其及物月峯なり
傳聞ハ龍安殯を得ハ出家の溜池の底迄ハ探索ハ
持来て後肥後の妙解寺の住持ハ新発の弟子成を以て是より今ハ肥後
有之由龍安後年市屋町の先ハ一寺建立の時祥雲寺と号して世続の間ハ
首級龍安盗取て葬り血ハ紅戸へ至りしと云ハ誤て月峯の同一會ハ有

峯當作峯以下同

敬書記ハ同ハ縁有者故同ハ縁住是ハ盗を得るハ其敬書記埋ハ畫一貫
ひ得ざるなり

○長谷寺

一長谷寺書ハの未筆後の脱ハ有其初ハ麻布溜池の南の端ハ有て此ハ別當流谷
の地なれハ底岩地の坪廣く十間ハ故長谷寺の住持と相殯て溜池の端の
寺地を上底岩と住居其代りとして當ハの底岩地の門ハ廣く代地を渡
さる初ハより所添約束故ハ其寺ハ底岩の門を構させ出入の口をも底岩の門
より出せて門寺とせらるゝ歎を毎度願ひ雖ども別ハ出せを終ハ其住持
ハ迂化して後住の代ハ云事と成を他所ハ有寺地ハ自分の居底岩ハ其代地を
十底岩の門ハ出入の口も別ハ出せらるゝ事一通の致さる方と同て書ハ
方より東の方を寺へ添地して出入の門ハ設ハさせ有故ハ外ハの見分もよく
其表通りの門前の借屋と成古添地と成を立像の釈迦ハ本堂ハ横ハ
勝手より此寺流を改曹洞家と成

○雲光院

一雲光院今ハ深川ハ有其初ハ石井町と云町底岩の地ハ有雲光院と中院号ハ

一位の局の号也存生の内小頼坊立一寺を建立し寺領百石を寄附を放て死
後菩提寺と為て雲光院従一位と称て其初め今川の家臣神尾孫兵衛の妻也
天文の頃年中初年に駿州今川義元の子氏真在位の時神尾夫婦出家り
もしくとて後義元ハ桶狭間に於て討死の時孫兵衛相供て討死す其妻親
里なりしハ甲州に住き飯田筑後守の久左衛門方に住て其別懐胎なりしかて
男子を出せし時を助と名付て天正十年武田家滅して後に秋に至て武田の空
出を北条と中年ひの時甲州足駒出て信濃に出て御目見す久浦に絶ぬ行成ハ
もなく出産の一切を能出来ぬと世に其世評高く遠州に住き者故常に側に義を行
幸も中側に周旋ひ所茶の局と名を称を助ハ元勝して神尾と名を改号し
相勤東金の近所金近村にて三千石賜て後に刑部大浦に任し将軍家に謝成
さを其孫孫〻子流〻て所茶局ハ大坂を出陣和睦の出後住首尾綱ひ出産

美として刑部大浦の孫なれハ石出さを新規千石賜て其後宮内
父の家督を願ものを以て其跡石出さを是以賜豊前守と云所茶の局後東福
門院様出内の時代に仰付られ二位に成て さを付二位に成て さを付二位の縁ハ平家の二位
尾鎌倉の二位の禅尼名威有と以ても不久不幸の例なる代目出産前の幸しる
産と中絶仕られ出を以て一位に叙られ是局の沙二代目の飯田久左衛門に又百石
賜べきと仰付て ども出を後を安堵の為に局より中入成瀬家の組
入是成瀬一貫愚意故あり故に孫尾張を後を神尾市左衛門に百石
大浦同腹の弟にて国内竹右衛門の也二代目の飯田久左衛門の聟の縁を以て
一位の子分と成故神尾と称を

法華
法報寺

一法恩寺法華観音堂の西の也其始ハ今の八官町に有て是を常別て妻と
有て江戸へ引移り親鸞上人を関東に成依て其子孫自作の像を係て
義不さを宗門を初められて出頼 有故に一宗の案弱にて東本願寺流
出産ハ院家の上座なり

○五智如来一如来寺芝高縄ヶ通ノ五智の如来堂ヲ建て世ふ芝の大佛と云ふ仏佛建立せしを天台宗ゆえ但馬と云ふ本食之依て本堂迫瓦立て東叡山の末寺也
當所江戸創業の始い刑罪の屠所なりしを後鈴ヶ森の地へ引移り但馬
を後相州一石ひふ藥師如来を建立し其所へ移して迂化を其跡の一石ハ
同宗徳川家の地へ寄進故目黒の地へ寄進し其後本食空響其所へ移り
後て一石ひを再興し其も廻せしを其後本後一石ひ繁昌をなる

○東海寺一東海寺北品川西ふ行り其頃の山殿ひと云ふ是ハ茶屋の山殿の跡へて寛永十五年
沢庵和尚の開基也是より先沢庵ハ南宗寺の院を出て大徳寺流へて一宗
へて時の老和尚也其根本春屋宗園古渓宗陣一凍紹滴の
三人笑嶺和尚の弟子へて万江宗稚玉室宗珀江月宗玩沢菴宗彭
芳春屋の弟子なるへ春屋迂化して沢庵ハ一凍の弟子なる
第江の弟子天祐紹果と玉室の弟子玉舟宗璠いまと齢八十七ふ満さる式
和尚となるへ一宗の法令ハ殺き多き事法儀を破ると紫胜

活東子云紫嵒厳語略云玉室泉州堺人也
とあり兒東島とあるハ愚龍鹿ヶ谷會合ゆ
一般ならず
同上寛永乙亥三月
美命到江府寓于但馬寺拝生宗矩
之淺部之別業
生玉室江月之
二老在江府
同十三丙子七月二日師及玉室於江城問宗門意旨十月帰洛云
紫嵒厳語略
到李冬帰東海寺正保二乙酉十二月十日寅時寂夢一字御筆而化壽七十三歳圓

僧ありき故遠へ放ざる由之三年の後ハ免の時玉室ハ老年へて海上の往来慈後
尋ねて公迫能當東海寺開基也天正元癸酉年生但馬國出石三浦介義明末裔秋庭
綱典子也正保二乙酉年十月十日寂春秋七十三

一光琳寺今ハ麻布廣尾へ行り初ハ麻布谷町の服ふあり盤桂和尚の開基也和尚ハ
播州の生まれて備前の三友寺の上翁和尚の弟子へて妙心寺の流之小僧の時より
禅機有十七八才の時長福寺ふ住て隠元禅師の会下へて中僧を勤の法
意式尋同へて隠元の芸へ少る意ぜず故ふ是を捨て法國へ經歴して京へ出
支より江戸ふ来り濱屋の元食の中へ入て俳諧を松浦結信の馬奈庵安の外へ出て
馬の尻筆遊を事毎也時へ元食の形へて筋をうぶり馬責せ一遊ふ立て其
馬の系乃式第へ馬奈是を咎へ式其系心を批判せふ依て其意を感心

是氏用人小傍輩小稙ラ人結信の耳ニ達セ結信不審ノ存ヲモ又宴テ馬ヨ
ヲ出セ亟テ通リ掛ヲフ結信是ヲ聞テ蔭ノ間ヨリ見ルニ先年長濱ノ陣元ノ
會下ニシテ見覚ヘモ多キ者ニ出家ノ面色有ト見覚エテ又其通ヲフ再篇
見届使ヲ以テ先年長濱ノ陣元ノ會下ニシテ對面有テ其名ハ何ト云ト尋ラレ
ケレ其通ヲフ内産ハ云ヲ以テ用人ヲ中ヲ以テ是氏ニ申遣ラレケレ是氏
若ヲ儘ニシテ多ヲフ内有光風呂ニ入ヲ長服氏若稙ヲ出セ對面有テ夫ヨリ結信ノ方ヘ
岡直法ヲ尋問新恩意セラレ中有谷町ニシテ一宇ヲ建立シ光林寺ト号セ
盤桂ノ中ヲヘ結信也夫ヨリシテ京都ヘ上リ法式親ク結宮ニシテ心法ヲ練ル僧徒
事ヲ法ヲ聞キ皆中ヲ以ヲ除ル後テ　仙洞ノ叡聞ヲ達シ法義ヲ説ク四海弘智
廣ク禅師ト号氏賜ヘ京都ニ出ル寺氏取立テ直ヲ中ヲ有ヲ寺國播州細川
寺ニシテ百日説法ヲ後細川ニシテ迂化ヲ

○善福寺

一善福寺麻布一本杉ノ先雅色町ノ南ニ有西本願寺流ニシテ院家地也當地ハ

真言宗ニシテ瑜伽ノ行念スル寺ニシテ住持氏了海ト云親鸞當國中興ノ祖
卅年ヲ止宿シ住持ト法縁セリ其帰後シテ夫ヨリ一向宗ト成ル國ニシテ大寺ノ
門ヲシテ本願寺門主関東中興ノ祖ハ必此寺ヘ立寄ラレ也

○正覚院

一正覚院三田寺町ヲ有元来福徳院ト号ス正則ノ院号ヲ有リ元和五己未年六月
備後安芸両國没収ニシテ別田利ニシテ四万八千石ヲ賜ヘ息備後ヲモ相続ヲ羽州ヘ
移リ備後ヲ以ヲ翌病死シ正則ハ寛永元年七月十三日彼地ニシテ六十四ヲ以テ
病死セリ江戸ヘ註進ヲ付検使ヲ以テ堀田勘左衛門刑義ノ所ヲ是氏待ラケテ
家人津田江帰ヲ落ヲ射ヒ火葬ヲ仕ラレ以テ配所願ヲ以ラ市ヲ元ヘ
三千石賜ヘ故ヲ火葬ヲ仕リ骨ヲハ京都ヲ登セ妙心寺ヲ葬リ墓ヲ収棺中ニシテ一宇
ヲ建立シ正則ノ院号ヲ以テ其名ヲ唱ヘ依テ蘭秀和尚氏開基ト云是大龍
和尚ノ中ヲ之ヲ後蘭秀和尚江戸ヘ中向ヘ當地ヲ一宇建立セリ是江戸三田正覚
院ニシテ正則ノ墓ヲ建ヘリ妙心寺ノ流也

○泉岳寺浮島の森

一泉岳寺當時ハ芝ヲ縄手ノ北續ニシテ海ノ森ト云ハ世ノ事也其初ハ麻布

溜池の東はしらのうしろ今の古波家の屋敷地に有しゝ也橋爪総泉寺
先岩ヶ寺青松寺當寺曹洞の觸頭にて紀伊三ヶ寺と唱へ開基ハ　當寺の玄光
和尚開基せらるゝ事ハ世人曹洞宗なりと云ハ誤なり　獨庵禪語の書も撰ぶ
心鉄禪師和朝に渡海せらるゝ時ハ御家にて隠元禪師来朝し其流の尊者と
宗教せしの曹洞流なれハ心鉄を長者とせんと志し執量せらるゝ人ども云ふ
ち力ふ不及を見者捨てゝ見よ　中國河内に隱棲して経師村に住せらと
一東禪寺芝高縄の海岸にあり其始ハ溜池の東南の側にして其所に有之
其右の麻布通りの坂を霊南坂と云ハ當地の開基を霊南和尚と申候
皆人新明じゝ始心寺流にて觸頭にして三ヶ寺の内也
一勧修寺宰相宗房卿他ニ遁ス
治承四年六月九日福原新都の事始と盛衰記に有り同書五条大納言邦綱
卿賜周防国六月廿三日事始六月十日棟上と建らるゝとも有り又六月二日都を
福原へ移さる既に八月に成平安の古郷　遁て　行く見の青門の詩

狀に付て入道人々の異見に同付新都を營らるゝ聞て秦趙高の事に思ひ
やりて鹿を指して馬と云人有りしを思ひ合せ[鹿を指して馬と云人有りしを思ひ合せ]と勅旨
寺宰相宗房卿に詠めしハ十一月廿日也翌廿一日朝倉に京遷ハ法皇
後白河卿の一ツ會合の席に抑入道の指して執しの福原の新都也法人新都
を廢しに宰相殿に行心かけしに宗房卿の申ハ
うゝは若も後と結事に成て思ひ立時ハ心底ゆゝしく人に問ふを思新事ハ必を
人に問答をさるを入道の心のもとに任ふ都遷とそ申ひしとも人の歌きも考く
流石古郷に及ハ栖絶なひしに折ふし門の所記有人の言へ新遷せんと
思ふ心の内ありしに推量て斯ハ申しうとぞうゆゝしくかゝる事を思ひ
申候

○惺窩先生

一明壽院義敏夫諱ハ肅ハ冷泉三位為純の子にて實の母ハ毛利河内守
八方石余系不詳秀頼の娘也始京極長門守高吉嫁一宰相高次侍従高知を
産む高吉逝去して那義人の方へ再嫁を世那義人ハ冷泉家庶流の者也

甚方ゝて歛夫を產を故ゝ京極高次高知共同腹の兄弟之非義人冷泉家の流
なる故暫幸家の着坊せり始を僧と成て葬首座として父横死し其息為
將初ゝ其一族の門より着坊せりして世人ゝ還俗して暫家を持て後幸家の為勝
ゝ家ゝ復し流し支より儒學者ゝり始て朱儒の性理學ゝ因て無ゝの新註を
其ゝ講せる門人多ゝ世是崇敬し惺窩先生と稱そ後頭ゝ發ゝ一種格ゝ
強し其長き説多ゝ採用てりと是頭ゝ刹るといへども父母の肉を割ることなる
儒道の志より之後藤の南久菊巢野ゝ居を大御所林羅山代板倉伊州を以て
羅出ゝ弟子とも少と技助の為る内今方迄可賜とのこと事といへども不羅出室て
伊州自身為ら出ゝ弟子閑多ゝ不羅出ゝ自弟子りて林道春 是其後
永井信濃守立城淀ゝ出ゝ暇を休息の門二男伊賀守十五才なる時同道一先生の
同室ゝ立寄し一時一夕ゝ不入竹極ゝ侍し慇懃なる故つき一時余り對談なる
ゝ自伊賀守も其門竹極ゝ入るを実居り甚感強き人なりと伊賀守物語
せられし也程學ゝ入て道を詩賦を能し和學ゝ達せり明教院と崇敬せ

為純為勝父子天正六年四月於播州戰死為純八男將于時如老故兒明壽院知者首座還俗而着坊其家有れ文の疏不審也

られ事ゝ始信濃守ゝ付相國寺の塔頭多ある明教院を持る故の坊名を父為純
の敵を討んと還俗し赤松氏の人ゝ助ゝ難言敵を討ん事と云説有
冷泉家為純の息為勝ゝ歛夫より源し為脩為將為景と相續せり為
景も此歛夫の子と云し野間三竹の家譜ゝ三竹柳谷子常し惺窩先生ゝ
為為景松永長頭九ゝ子昌三と屢會と載る是為景ゝ歛夫の子
ゝて後年歛夫の分脈ゝて家を継し見し元和六年九月十二日
年を侍ゝ又十九才之世間ゝ出書の道春点ゝ惺窩の文義理を考門人り
素讀ゝ教し給ら也ら讀ゝ世を道春ゝ教ら也ら道春直ゝ点ゝ板行
し事ゝ先生の讀也

愚説採る歟ゝ

○長性公横死

九条摂政兼實公の九男後京極摂政良經公建永元年三月横死ゝ是雜人の為
ゝ事ゝ為ゝ世ゝ秀ゝ歌を能し中納言定家ゝ中ゝ言定家ゝ中ゝ
出歌ゝ定家ゝ多ゝ中ゝ定家ゝ是ゝ姉ゝ其後親家ゝ
流ゝ中ゝ九条殿ゝ常ゝ為ゝ也ゝ故親家人頼ゝ天井ゝ忍入て流

潘ふ害ーーーせりと世ふ云伝へ（ふり後亡御門院の時明應元年京極
家ふ在ーーー日記叡覽ふ入へきよし勅諚ニ付義忠ふ
仰ふ紙ニ枚を封して封有ーー級無條件尋有ーふ先ーー代ふを斯の如く封
戸ふして子孫ふ賜て封を切て見べしとの傳ーーふ付如何相の事ふて
斯の如くせしめ給ーーや存ぜぬよしーー勅答有之史ふ叡覽有ふきよしーふきバ
其儀ハ格別の事と一級封戸ハ切て叡覽の所ふ建永元年九条良經ふを
殺害ふしふ事ふ要書記ーー有り世事ふ年久敷相知ざる所ふ其事ふ慥成事
天聽ふ及ーーふハ其分ふして其意を弛きふとの解釈ーーて先（不審ナリ）迚在實が科を以て
當時の正四位ふ叙言唐橋在数ふ死を賜へ九条殿ふ仰て殺害せしふ依て其
子在名と謫せしふ家絶ーふハ世ふ孫在通後年ふ返さる再京極の家ふ成ふを
赤座七右衛門が嫡子ふて後ふ大坂陣の時義城ーふ赤座内膳が兄也ふ同ふ
忠ふを賜ふ関ヶ原の付大谷刑部が婿ふ付出軍ーー北國

明應五年正月七日於九條殿其被害年四十九
○赤座久兵衛

征伐の列ふして丈ふ大谷ふ伴ひ美濃へ馳出て相共ふ関の原川の原ふ陣取
九月十五日の合戦ふハ服坂中務が嫡子ふ小川土佐ふと相共ふ四人原川を
前ふ當て後軍ーー東軍ふ向ひ合と云へども松尾ふ陣取ふる筑前中納言
秀秋の母を兼愛たり是秀秋ふハ敵へ裏切の約有と以風ふ成て大谷
ーーたる所ふ安ふの如く秀秋ふハ敵へ裏切せんと思へるよりして世人の方へ軍使
を馳て其関東へ通達ーー軍忠有らハ恩賞の儀ふ成ふる執成ーふ進ぜへくと
云ふり服坂ハ是ふ前関東ふ方へ参るべしーーと申通ーー意ふ成て早速軍を
進ぜーーふ付ふる後ふ小川ハ軍ふ出ふ前ふ心ふ同ふ軍ふ出し
ふりと以ーーふも忠戦ふ手領安堵の後ふも公辺ふ成ーーふ成て家督立ぞーして
其家潰ふり赤座久兵衛ふハ裏切本意ふ有ーーざるふ依ふ勢を引連て陣
所ふ服ふより直ふ今度の領地へ引入ーーの関ヶ原ふ居ふ味方退転ふ付今度
ふ去ふ加賀へ来て中納言利長ふ頼ふ強ふ居ーーふ静謐ふ及て利長禄を
賜ひ家ふと成永ふ備後ふ改ふーー安ふ有ふ後孫九郎家督の後亡

作と改父仏来連歌を嗜み古体を達人なりて梅の裏へも其名聞へ〜くべ
武蔵鐙と云題を賜り

一聲ハむさし鐙かりそめ〜きく

又夏の資なふ

見渡せハ夏あそさかりの二の色

郡内共ふ敷感有て鐙の紋有る金紋卿の子孫今ふ持伝へ
古体後ふ入道〜て如閑と号を其子永系久言後花系と号を是より 以代
當時の九系也

定家卿美古今集

農民ハ奇之捨るべからず

一駿州今川家ふ定家卿の古今集有是ハ三条西殿方ふ持伝へるなり 乱世の
比公家衆ハ見つぐべき人なく〜なり〜ハ銭有〜ふ三条殿ハ今川ふ縁有故
時〜見物有〜礼とて送られ〜と民田伝受是を備て返さで止メ置〜ど
滅亡の後徳川殿ハるふ今ハ儀の中文庫ふ有〜ハ元禄年中英濃守
古保ふ〜〜賜り〜ふ一とせ彼家ハ焼失の世間世書火災ふかゝる退轉を

惜むべ〜

石川五右衛門

一石川五右衛門と云者生國遠州濱松の侍也始ハ真田八郎と云て河内の石川郡の
内古庵と云殺害者と而縁有るを以て其家を頼て居る石川又右衛門と改号〜
終ふ強盗と成る文禄の末年捕られ釜炒の刑ふ行れ〜り時ふ三十七才之一説と
云ふ如きなるも相共ふ奇ふ

石川や云〜と辞世〜〜り

大塚の怪異

一江戸大塚村今ハ御城より西北ふ續て家居の美也世大塚の南の方の地低ふ而
を若荷谷と唱ふ也小日向の服部坂より宮下り先〜通る而ふて小石川の前ふ通り
右の道ハ小寺のみふて右側〜寺地ふ有て通る
而の九側ふ明き屋敷地ふて三百坪計の而ふ畠の跡ふ残る也芝地と稲富氏の
人主〜ふ云へども屋敷守の人ら〜き者ふて居るあらぬ入口ふ当る門のみ〜服ふ通
心者の門ふ成るもの出ふ入の如くふて唯独居ふて出入の人絶ふ見ふ也〜〜の氏
ふて有来るや屋敷の内ふ大成る石塔三四ふ有て垣根ふ成ふ有ふ

見てうちさべて世反姿の由緒知る人なし一応ぐら一応不相応しまふ身人通るも
なき外面なるべ家ふ入て曾て往来の人なき故世辺ようあ申しき相有と云ふより
有の明反姿ふ化物有りと沙汰なる事年々大野三左衛門と云者小田原の方より
大塚組反姿の帰るとて日暮過ふ及ひしかば世反を通るいと物さびき折ふ先へ
立て行く出家有り是あて能き道連なりと思ひ早く進み既ふ世反を離つ
らんと思ひ〳〵時其出家の丈ケ高く体事明反姿の垣根を越へ大石塔の又輪
の上より遥ふ見る程ふ体其口辺近ふかと思ひしが見失ひ迷て此辺
怪姿事ども時〳〵有と申氏の人是も日暮ふ及ひふ於通るしふ身道ふ急ぎ
是とと之蛙鳴出て恐ろ連て其方ふ変ようも出つまて見るまとる半所斗新
しく道のさゝり〳〵りて溝端の芋ものるる蛙多く集りしが拾て庚申ふ別まて
一足ゞ左右より出て喰合ふ喰負ふ方より又一足出を時向ようも又外の蛙出て
喰合事之ものあるも人ふ教是を見捨て立帰りしが其跡ふ多る所と知らざと
物語りふるる身我ふも其所ふ行りて蛙の喰合ふ成見ようと其果りて

小野の敵討

想蛙ようの一疋ふかを喰合ふと語るる
小野のおつうと云ふ女い常陸水戸の城主武田常陸介信吉卿の家臣小野和泉と
云ふ者の女也其始関白秀次公の中家人滝川志摩と云者の妻と成しが死別の後
天樹院様大坂城へ入輿の時中介添ふ成て伊勢を志秀吉卿へ差ふ成
陽光院の女御新上東門院へ入内の付中世貫ひふあつうと差て侍奉を之後伊勢
有しふ直ふ　東福門院様へ相招ふ相勤む後年江戸へ召さる更人扶持金
弐百両の内合力を賜るかふ〳〵女ながら大御所様の伊勢へも仕へ
居也〳〵　尊影を書写〳〵さよ〳〵細へ多り渠が男子久吉と播
州細千ふ有しが池田輝政殿御在城の付召さる禄を賜へ滝川長吉と
云ふ分ふ女子壱人ありおつう内裏ふ仕へ時是を在仕せむ　将軍家の
上洛の時真田内記供奉〳〵道筋の内世女と答ふ通〳〵支る此所百余都ふ至る
う男子一人産うおつう江戸ふて春日の局と懇ろして執成〳〵多き成て稲荷
英法寺の吹挙ふて真田内記の孫の男子　之儀へ召出さるて三千石賜り真田

勅解由と名ずくり世勅ヶ由の男子後年幸家の家督に相續せ
新上東門院入内の云云勤仕に依て新上東門院後鳥羽帝の國母也世
帝即位天正十二年丙戌七月より秀頼簾中千姫君入輿慶長八年癸卯
七月廿八日ちんと十八年目也又奥ふ著せ不新上東門院侍女也しかふ朋御前後
秀頼簾中入輿介添と見へてう世文院ふて後光明院の女御ゐ〜でハ年
代ハ敷合ゐ
備内記の妾ゐる女ふハ後年江戸へ参らゐて春日の局へ移と入尾州江簾中ハ琴の師
と成ゐる琴のゐる也後尾州ふて尾と國を津國と号をおつう小肥の姓氏殊〜庭度
ふ有ゐる人ふと志ざをより神ゐ上典侍也氏幸ふ所望ゐ四へ稲垣三左衛門と云
人執持ふて小肥を世ふし小野次郎右衛門と号をおつう学ゐをゐて世ふ聞へ琴の
細の十二細の秘の文句を有ゐ當時の琴の事ハ箏の事ゐて十三絃也唐土ふて上古
神農のちゞめて桐の木を削ゐ名氏縄ゐて絃とせりと古書ゐる就せり是ゐる
黄帝の又音を調へて二十五絃の法をゐてう我邦ふてハ神代女の細天の番弓を立ふ

ゐ絃氏鳴らゐて未ゐ乃合氏未て安樂の聲を備ゐと神書ゐ見へてう是ゐ
十五絃の半ふゐる十三絃の半琴ゐを箏と以て字多天皇の時石川色ゐと以て命
婦筑紫の彦ふて唐人ふ逢琴ゐの彈ゐ弟ハ得て天皇ゐ奉る是今の
十三絃の琴也故ふ是氏筑紫琴と云て其曲ふ用ゐ来上古ふ遠ひ曲高精と
いへども淫聲ふ傳り有て後年其箏ゐの世て親へ章敬ゐ次中ゐ淫聲ふ溺ゐ
ゐり百年程以前琴の上手の公家元西國へ世ゐ〜一不ふて半琴を求ゐ
是ふて是居ふ上手の琴ふの譜を彈〜歴光ゐを若道寺ふ任せる法水と
いゐ僧中ゐと深く学ゐて法水後江戸ふ来り法家ふ住居て箏氏彈ゐそ
斯〜て還俗をとり夫ゐりかつゐふ似ゐ〜十二細の表裏と号けて蕗梅枝心盡
天下ゐ平薄雪ふ朝ゐ上の七細落衣桐壺の裏二細とゐ〜世後世琴の曲
須磨の曲扇子の曲雲井の曲の四細是氏極楽ゐ〜て習ゐを吏ゐ八橋検校
世ゐ年の半琴ふゐる氏門出〜て江戸世ふ琴ふ世聲者始ハ寺尾検校城所ゐふ
て前の名氏城溪と云後ふ後勾當ふ任せ〜ゐ上永検校ゐ下ふ属〜ゐ後

八橋検校と名乗りしも世間人半琴の達せし故多くの琴の秘曲を述作し
給ひしが又東福門院の御を蒙り十二段の文句を述作せし是浄瑠璃節と
いふ女の事也あみ立て事なり是を浄瑠璃と名付る初也戸田左門殿の抱座
敷に検校京より来て章節を付て小関勾当是を伝へて半琴の合を迎に
浄雲是を聞て浄瑠璃を文と謡ふ彼を始め源浄の弟子仁蔵と申者也是を
好で多人と成筑後と云人是也肥前と申人是也

能太夫

一慶長元和の比能の業なおなおしかれども金春太夫十郎節進と世に賞誉せし故何方にも
世人を招き仕舞仰付られる一日に人を多くたるに成進太夫舞をしてるふ一入今日も舞
見事と讃て金春太夫立出るふ行のふり舞も有り老年の事なれば疲労も白
毛まじりにて丈低く麻裃を見て下り成進は西本願寺の坊官にて流石の人にて是
皇子〻色白〻切髪有て衣服もきらびやかふ其業能きを以ていづれも少進ふ乃ち
奉きと皆人思ひ〻おふ其場能成事格別成るを感賞〻ふり是を名人と
云へり〻賞生古将監を後世皆人賞美せり其家は上掛りにて子孫の名人

浄瑠璃の始

世々七太夫も稽古して能の功なるべ業まったり是を以上るとい〻へ〻元禄
の比の金春八郎も流石の者にて其家の法を守て上る也其比或出るにて當時の
太夫行末を能く改て行末の所為成業ふこと尋られし比其
家にて観世織部幸若と云へども分なり〻賞生當時将監と
幸〻金剛又喜右衛門と同じ名なれば何ともやがて〻と
浄瑠璃の始は後水尾院の御を以て小野のおつると云女是を
能る浄瑠璃と云事成十二段の文を仕立る則其名を浄瑠璃と唱ふ其十二段の
功有るを以て是成十二段と名付く其章節は京都におなて沢角検校ふ〻を付
流初なり

一富田小右衛門其入道覚心を加賀利長卿出頭士大将淡井左馬介其兵力富田其二男
なり兵庫左馬介近習小仕（仕事）して生国を出て江府に出て富田摂津を資次
右兵庫なり古兵記流の軍学を嗜む或説流後年古屋氏部に補利直ふ付て渠が軍学

世ふ嶋ゝ氏以て大小名来會の侍必呼出さる後結時氏後〜其上迎世諸家勝敗
若悪氏同ゝ富田強と其参ゝ富田弱と其参ゝ
慶高 慶高存生富田八若年ゝ〜慶長の頃ゝ至まで在世也
の類連〜中ゝ直所を以て其仁小對〜て斟酌氏加〜て給ゝ且信長之秀吉之の
幸師次でふ是氏古戦噺ふ○渭波家郡絶四〜流牢困窮を賤書籍を
賣賣て後門ゝ北条安房清以三ゝ方ふ潛居をゝ事累年也是利直至の氏孫
相模ゝ政直貞享二年中入道覚心氏招て仕ん とゝ〜ども老衰多病ゝ
ゝ同て辞〜息小右衛門某奉仕を政直賞て禄を賜〜軍学中ゝ数多有ゝ
就中松井孫右衛門某（縁中宇和島伊達家士）北条安房清以三ゝ（谷細徒）息小右衛門某蘊奥氏
極ゝ 徳川家中代〜氏略甲誠幸戦第ゝ又賞心給ゝ傳ゝ所の用を川古流
也ゝ〜北条以三ゝ中横田幸右衛門布政（後入道号幸山）傳〜得ゝ所古戦話一隅のゝ蓋
ゝ幸紀流軍学淀井三右衛門成儀と相傳成儀始ゝ 文献院様ゝ徒流之走競
上競毎度達者仕是ゝ出取立ゝて著ゝ記録を好ゝ院達 上岡ゝ書物奉行を

仰付られ其父八治ゝ支伊成と云母ゝ是利将軍家の書役按摩ゝ其老後出ゝの
女なゝ淀井伊成ゝ嫁〜て一男ゝ氏産む源若年ゝ付父伊成幸〜淀〜成
長〜て三右衛門成儀と号ゝ或時母治て同ゝ古蔵の梁ゝ半蔀筋ゝ付ゝ
書記ども之我父掃部ゝ持伝〜父八老衰我八女ゝなゝ故ゝ授一言もなゝ
仍て以ゝ〜ふ他意也と云〜成儀見て伝〜自得ゝ世ふ云ゝ幸紀流の軍学八
成儀を以て權輿ゝ〜て 非書傳来の所以を其母相語ゝ云〜年月姓名字号
等氏覚〜ゝ唯大ゝ凡ゝの如〜

伯耆國小早川隆景家士某代ふ日蓮義也然ゝ不其妻帰依の真言僧
を勧めて其夫を終ふ政家せ〜ゝ〜ゝ後ゝ其の檀寺墳て京都本寺〜
新〜則二十ヶ寺相強〜て後僧を以其ゝ方氏隆景京〜出ん とて京ゝ方ゝ
の僧氏撰ゝ〜ゝ為ゝ法華法印ゝ定（日蓮聖人謂法印ゝ僧住但野寺村院称法印ゝ）後僧せん
と強寺兼引〜て則治用銀ゝ を與〜ゝ印定伯耆國ゝ至て隆景薩摩ゝ府
ゝ出を待て其場ふ沙達〜隆景是氏見ゝ僧八行國ゝ行國ゝ沙ゝ印定

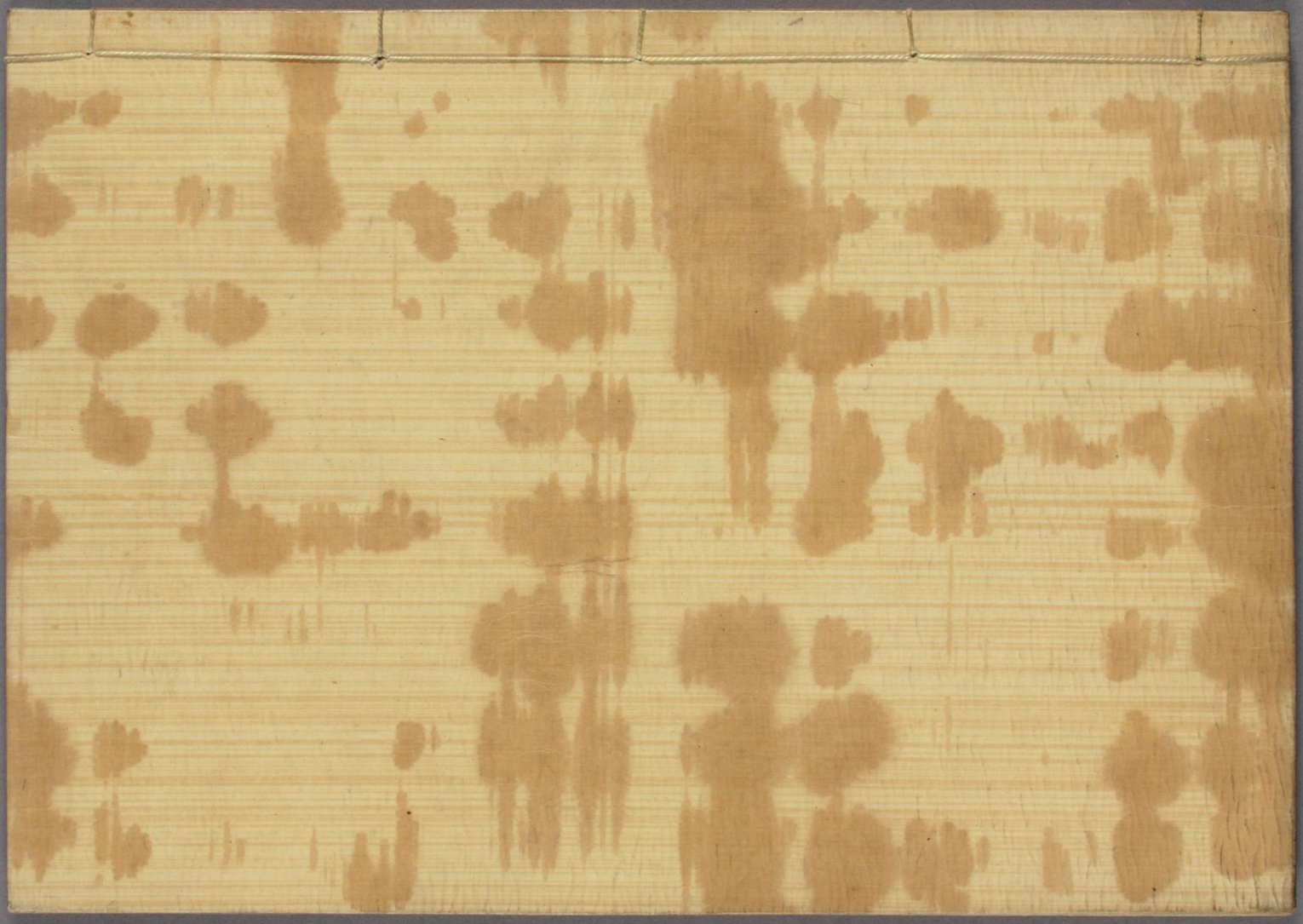
其時伴の事ども直弥を則居城に伴ひて要害の事共同百ヶ歳許の
前後逗留二十日ふ及ぶ事ありて帳を立ひ其所を發を抑今度伯別
ヶ同の思願ハ名和伯耆守長年ヶ孫昌之と云者四国ふ元弘建武以来
四統とも傳来の旧国及び怨望ふ依て尋常り逢ん事以形ふ依て
彼方ふ赴る事と云へども智者命〳〵空敷去ひ以暮を三日ハ又完而〳〵
而〳〵経廻り安ひ時ふ或人の曰世田畑の先矢村と云行り強居所の老人居
住する事久〳〵其仁ハ知られと云ひ日定則其道程一里計り而る半蔦銘
屋ふて老人の来れ日定傳ふ云て彼老人ハ行心ふ〳〵其所を過きたひふ
振返り見て相ヲみ終ふ近長り昌之事以同老人則伴て茅屋ふ
入ル則老人が室也日定ふ入る随て懇以盡を老人感〳〵太平記理盡
抄と云書を以て口授を終る数日以経る而老人泄浮して室病食〳〵病
中ふ〳〵口授殘〳〵相伴む事凡二十日着病〳〵臨終ふ及の居我則
名和昌也理盡抄并古書ども授與ふ云て終ふ没を日定感涙袖を

況〳〵送追福懇ふ執行ひ帰家を後其妻摂津家ふ仕授せ
む或を門縁有と云ふ是迹を知られと云〳〵
是利將軍義輝公永禄八乙丑年五生害世年隆昌家三十一才是より卿日定伯別
ふ至て又古代義昭公落去天正元癸酉年隆昌家三十九才伯耆國ハ天正十年近
隆景領ふ
明暦丁酉春江府大火有是以さけんらして浅井資賊を運び轉ぶる別
理盡抄巻途中ふ於て取落〳〵其家ふ入る〳〵後年太平記細目岩校
浅井成儀見て是を理盡抄二の巻を以て推理して書ふる所ふ入ること
物語の由　横田布政入道幸ふ兼傳

文久辛酉室陽校正遍
壬戌三月念二再校

活東子

明治二十一歳中夏

筆者

妻木頼徳